

## 20231003 ゴミは燃やすもの！？

前回のテーマは「もったいない！」でした。しかし、実際に生ゴミはどうしても出てしまうものです。給食の残菜もゼロがいいのは言うまでもないことですが、実際は人気メニューといわれる献立の日でもゼロにはならないといえます。そうして出てしまった残菜や生ゴミですが、日本の多くの自治体では「焼却処分」しています。生ゴミは水分80%といえます。つまり「水」を燃やしていることになります。ちゃんと燃やすには、相当燃料がかかります。実は燃料としてプラスチックやビニールが一役買います。プラスチックは元は石油です。これはいい燃料になります。燃やす燃料として利用されるのです。そして、この利用を日本では「リサイクル」に位置付けます。ゴミを燃やす燃料として使うことを「リサイクル」に位置付けている国は日本以外にあるのでしょうか。

そもそも「燃やす」という行為自体が相当自然環境に負荷をかけていることは、今さら言うまでもないことです。それなのに、4年生のゴミ処理の学習では、堂々とゴミの処理は「焼却」「灰を埋め立てる」と指導しています。正に、焼却処分は文科省公認（ご推薦？）です。これは、「未来もこれでよろしく！」とやっているようにも感じます。実はそれとは別の見方もあります。プラスチックのプラスチックとしての再利用は、再生・加工の段階でエネルギーと手間をとっても必要とします。それなら燃やして熱にしてその熱を利用する方が実はトータル的に見てエコなんだということです。うーん、これは、もっとデータからしっかり見直さなければならぬかもしれません。

ただし、はっきりと言えることは、「生ゴミは燃やすべきでない」ということです。元は食べ物です。そしてほとんどが水分です。かつては、生ゴ

ミは土に還し有効な肥料として次の野菜を育てる養分になっていました。生ゴミは、「腐らせる」のではなく、微生物の力を使って「発酵させる」のです。その装置が「コンポスト」です。このコンポストの普及率は、実は日本はとても低いのです。生ゴミの再利用を積極的にすすめることが、生活者の私たちとしてはとても大切なポイントになると思います。